アウトリーチ活動報告

―― 卒業研究・キャリア支援プログラムとしての学生活動を通して ――

A Report on Outreach activity

―― Through student activity as graduation thesis work and career support program ――

鎌　倉　亮　太[*1]
KAMAKURA　Ryota

要約

アウトリーチとは本来「手をさしのべる」という意味を持ち，「コンサートに来てもらう」のではなく，「コンサートがその場所へ向かう」活動のことをいう。

本稿では，2019 年度からの新カリキュラムで新たに制定された 3 年次開講科目「コンサートプロデュース論」の成果を基に，翌年に行われた音楽総合コースの卒業研究と，キャリア支援科目としての「アウトリーチ活動」の成果を報告する。そして，この活動を今後発展させ，更なる学生の学修成果の水準の向上と，大学の教育研究活動の維持を目的とする。

キーワード：アウトリーチ，コンサートプロデュース論，卒業研究，キャリア支援

1．はじめに

芸術学部音楽学科は 7 つからなるコースで構成されている。その中の「音楽総合コース」は従来存在した「音楽指導コース」から発展した形で再構築し，2019 年度から始動したコースである。音楽の実技と教養を総合的に身につけ，音楽系の就職を目指すことを目的においている。具体的には，指導者や演奏家だけでなく，ホールスタッフやステージスタッフ，プロデューサーなど幅広いジャンルが挙げられる。

そのためのカリキュラムの一つとして，3 年次開講の科目「コンサートプロデュース論」という新たな科目を誕生させた。本科目は，学生が実際にコンサートを企画し，実際に公演を行うものである。またその授業での成果や経験を活かし，4 年次には，学外に出て「アウトリーチ公演」の企画を立ち上げた。学内で学んだことの成果を外で発表できる機会を設け，より実践的な学びをすることで学生の学びの質を担保した。

本稿は，コンサートプロデュース論での学びを通して見えた成果や課題を整理し，さらにそれを踏まえたアウトリーチ活動での成果をまとめたものである。

＊1　札幌大谷大学芸術学部音楽学科

２．2021年度「コンサートプロデュース論」の概要

本授業は，３年次前期に開講される科目であり，先述の通り学生自身がコンサートを一から作り上げる授業である。学生は一人一人がプロデューサーとなり，コンサート制作に関わる一連の業務を体験する。その体験を通じて，社会に出てから役に立つプロデュース能力を身につけてもらう事を授業の目的としている。内容は多岐に渡り，曲目検討，演奏者依頼，台本作成，道具作成，リハーサル運営，当日のステージスタッフ業務（照明，音響，ステージマネージャー）など，枚挙に暇がない。

指導体制として，大石泰客員教授が担当し，小山隼平准教授と私がサポートとして関わり，３名の教員で授業を運営した。大石教授は，テレビ朝日へ入社後，「題名のない音楽会」や「徹子の部屋」などのプロデューサーを歴任し，その後東京藝術大学演奏芸術センターにて教員として，「コンサート制作論」「劇場技術論」等の授業の傍ら，主に奏楽堂を舞台としたさまざまなコンサートの企画・制作を担ってきた方である。まさに，学生がコンサートをプロデュースする第一歩をサポートするには適役である。

大石教授と協議し，プロデュースについての理解を深める講義と，学生自らが企画から公演までを手掛ける実習の，２本柱の要素からなる授業を展開した。

授業内容とスケジュールは以下の通りである。

	日時	内容	課題など
第１回	４月17日　２講目	コンサートプロデュースとは？	
第２回	４月17日　３講目	履修者面談とグループ分け	レポート：「題名のない音楽会」についての所感
第３回	５月15日　２講目	音楽をどう捉えるか ～「題名のない音楽会」を例に	
第４回	５月15日　３講目	「創造」は「想像」から ～イメージすることの重要性	
第５回	５月15日　４講目	グループ内での役割分担の決定	課題：各グループで２つの企画案を作成する
第６回	６月19日　２講目	プロデューサーとディレクター ～プロデューサーの仕事	
第７回	６月19日　３講目	公演企画の決定（６月）	課題：企画書と台本の作成
第８回	７月24日　２講目	コンサートは生き物 ～正解は一つではない	
第９回	７月24日　３講目	公演準備の進捗状況のチェックと問題点の洗い出し	課題：問題点を解決していくこと

第10回	9月11日　2講目	公演リハーサル（グループA）	
第11回	9月11日　3講目	公演リハーサル（グループB）	
第12回	9月11日　4講目	公演リハーサルの講評とグループディスカッション	課題：効率的なリハーサルを行う
第13回	9月12日　2講目	公演ゲネプロ	
第14回	9月12日　3講目	公演本番	
第15回	9月12日　4講目	公演撤収と振り返り	レポート：公演の振り返り

本年度は，履修学生が11名であったため，2つのグループを作り，それぞれの公演を行うことにした。リーダーとなりうる学生を教員側で2名選出しそれぞれのグループのリーダーとして発表し，その他の学生はあみだくじにて決定した。

公演の大枠として，1グループ20分程度の発表にすること，新型コロナウイルス感染症による影響を鑑み，無観客公演とし，後日映像配信を行うことを決定し，準備を進め，公演を行った。公演は全ての講義の終了後，YouTubeにて限定公開とし，学内関係者や音楽総合コースを志望する高校生へ向けて公開を行った。

先述した15回の講義の他に，学生の希望を受けて，大谷記念ホールの照明・音響設備の内容説明，使用方法についての講習会を行った。他にも，授業外の活動として，学生同士のリハーサル3回，通し練習1回を実施し，その他夏休み中に自主的に集まって，道具の制作などの活動を行った。

本番概要は以下の通り。

日時：9月12日（日）13時30分開演（無観客収録公演）

場所：大谷記念ホール

Aグループ（履修者6名）：「はらぺこあおむし」

Bグループ（履修者5名）：「Dream Traveler」

3.「コンサートプロデュース論」の成果と課題

本公演は，2021年9月という新型コロナウイルス感染症が日本国内のみでなく，世界中で蔓延した最中で行われた。そのため，舞台上の演奏者の間をパーテーションにて仕切ること，リハーサルも教員立ち会いのもと許可制で行わなければならなかったことなど，制限が多い中での活動となった。

授業最後に提出された学生のレポートからは，大きく4つの課題が挙げられた。

まず1つ目は，選曲である。今回は，無観客で行ったこともあり，観客の対象年齢などを絞らなかったが，ストーリーと音楽を関連づけた内容にしたため，練習時間の制限等もある中で，難

易度やストーリーとの関連に多少無理のある選曲になってしまった。

２つ目は，台本書きの難しさである。学生は台本を書いた経験はほぼない。そんな中，学生が受け手である観客がどう受け取るかを考え，工夫しながら台本を書くには，学生自体の経験不足や指導を行う体制の不足を感じた。

３つ目は，履修者の人数が少なかったことから，履修学生自らが演奏者を兼任せざるを得なかったことで，制作全体を見渡すことが難しかったことである。全員が演奏者やナレーター，照明音響などの複数の役割についたことで，全体統括者を置くことができず，学生がそれぞれの役割をこなすことで精一杯になってしまったのは，指導教員として反省すべき点である。

４つ目は，機器操作の面で不慣れなことが多かったことである。大谷記念ホールでの機材講習も行ったことで，どこに何があるかについては把握できたものの，それをどのように活用するかについては，多く課題が残った。具体的には，照明の明度が暗すぎたり，スクリーンに投影した映像が Wi-Fi 接続が必要なものであったため，大谷記念ホールの機材環境にはそぐわないものであったりしたことなどである。今後，様々な演出や照明・音響効果等を考える際に，大谷記念ホールの設備の制限等については，事前に確認することが必要であると考えるが，可能であれば設備の更新等が必要であるとも感じた。

今回の経験を経て，コンサートを作る一連の作業を肌で感じることができたことは，何よりの成果である。また，学生や教員との連絡事項，共有事項のプラットホームとして，Google Suite（Google Classroom，Google ドライブ，Gmail）を使用したことは，大変スムーズで効果的だと感じた。特に，進行表や台本など，書類のやり取りが多く，さらにそれを都度更新しなければならないため，このプラットホームを有効活用することは必須であった。

課題点としては先述したとおりであるが，何よりコロナ禍における感染防止からの制限によって，悔しさを残すことになった。しかし同時に，学習意欲の高い学生にとっては，次回こそは有観客で自らの力を出し切りたいという意欲にもつながる結果となった。

４．アウトリーチ公演「おはなしおんがくかい 親子で楽しむクラシック」の活動

音楽総合コース４年次開講科目の卒業研究では，３年生までの授業経験から将来を見据えた時に，自分にとって最適な課題を自由に選択させ，研究を行なった。2022 年度の学生の中で，自分がプロデュースしたコンサートを実施し，その過程から本番に至るまで一連の流れをまとめ，プロデュースの役割について研究する学生がいた（以後Ｋ氏と呼称する）。Ｋ氏は，2021 年度に３年次において履修したコンサートプロデュース論の成果を踏まえ，４年生となった今，もう一度プロデュースを実践し，将来もそれに関連した仕事をしてみたいという意欲を持った学生であった。

早速Ｋ氏と協議し，どのような形で実施するかを検討した。私は，札幌市西区文化フェスタの実行委員を何年も務めており，音楽系のイベントを考案する係を担ってきた。そこで，そのフェ

スタの公演の一つを札幌大谷大学の枠として実施し，K氏にプロデュースを任せ，その公演に関わる一連を卒業研究としてまとめることを決めた。西区文化フェスタ実行委員の皆様からは，学生の発表を快く受け入れいただき，60分程度の親子向けの公演を実施してほしいとの要望を受けた。

このような経緯を経て，具体的な公演の日程・場所等は次のとおり決定した。

開 催 日：9月11日（日）
会　　場：ターミナルプラザことにパトス
（札幌市西区琴似1条4丁目地下鉄琴似駅　地下2階）
仮設舞台・座席のため配置等については一定の自由がある会場。
観 客 数：最大49人
（新型コロナウイルス感染症対策のため席数を減らして開催）
対　　象：こども・親子連れ（ファミリー向けの内容）
演奏者等：キャリア支援プログラムの一環として参加を依頼
演奏者は最大10名程度

5．公演の事前準備

卒業研究としてコンサートをプロデュースするにあたり，大きく次の事項について指導とサポートを行った。

（1）公演概略（企画書）の作成
（2）出演者，スタッフの決定
（3）本番までのスケジュール決定
（4）台本作成
（5）リハーサル進行
（6）チラシ，プログラム作成
（7）ホール打ち合わせ
（8）当日進行
（9）本番を終えての考察，反省

以下，順を追って報告する。

5－1．公演概略（企画書）の作成

卒業研究およびアウトリーチ活動として，コンサートをプロデュースするにあたり，K氏の思うコンサートについて，企画書を作成するよう指導した。既に決定済みの日時・会場に加え，来場者のメインターゲット層やコンサートのコンセプト，曲目，演奏者の人数，音楽以外の要素の

有無，新型コロナウイルス感染症への対策等について順次検討した。

来場者のメインターゲット層については，西区文化フェスタ実行委員会からの要望を受け，親子向けの公演とし，はじめてクラシックに触れる子ども向けの内容にすることが決定した。当初は，親子向けということで，ディズニーやスタジオジブリの音楽を演奏することも考案したが，Ｋ氏の強い要望により，クラシック音楽に統一したプログラムにした。

また，会場として西区より指定いただいた「ことにパトス」は，コンサートホール等の劇場型の会場とは異なり，体育館のようなフラットな会場であることから，舞台・客席の配置等に対しての自由度が高いため，演奏のみではなく，舞台演出や視覚効果を行う音楽会とすることが決定した。

５－２．出演者，スタッフの決定

４月～５月上旬に公演概略の作成を行い，５月中旬～６月中旬にかけての約１か月にて出演者・スタッフの決定を行った。

プロデュースするＫ氏がコミュニケーションを取りやすい人選を行うことを心掛けた結果，彼が参加するサークル「アンサンブルクラブ」メンバーや2021年度に「コンサートプロデュース論」の講義を一緒に履修した学生たちが参加してくれることとなった。演奏者，スタッフ合わせて10名の学生が関わった。

卒業研究としてプロデュースを行うＫ氏以外の出演者・スタッフとなる学生については，本学授業『キャリア支援プログラム』内の「アウトリーチ活動」のプログラムへ参加することとし，本公演の準備および公演当日に参加することでの単位認定を行った。

通常コンサートの出演者の決定については，「演奏楽曲や編成を決めた上でその内容に応じて出演を依頼する」か「出演を依頼し集まってから演奏楽曲や編成を決めていく」かの２通りが大きく分けて存在するが，今回は時間の都合などにより，後者の方法を取った。しかしながら，当初想定していた曲目が，参加を表明してくれたメンバーでは演奏出来ないため，作曲・サウンドクリエイションコースの学生に編曲依頼をすることとなった。

終了後に，Ｋ氏は，予定外に編曲依頼が発生してしまったことにより当初予定していたスケジュールに遅れが発生したことなどから，演奏楽曲や編成をある程度決めた上で，出演を依頼する方がスムーズだったのではないかと振りかえっている。

５－３．本番までのスケジュール決定

まず楽譜を選定し，編曲が不要なものについては，そのままの楽譜を演奏者へ配付し，編曲が必要なものについては，先述した学生へ編曲を依頼し，完成後に配付した。

その後，演奏者については，各自で練習いただき，本番２週間前から全体リハーサル３回，音楽指導１回の合計４回のリハーサルを計画した。回数の根拠は，昨年度履修した「コンサートプ

ロデュース論」での授業時間外リハーサルの回数についての反省を踏まえたものである。リハーサルの場所は，なるべく本番の会場と近い広さを確保できる，響流ホールで行った。

５－４．台本作成

今回の大まかなコンセプトを「観客が動物の世界に迷い込み，そこで様々な動物と出会う」こととした。「楽器」と「動物」を関連づけて紹介することで，子どもたちが初めて見る楽器に対して身近に感じることが出来るよう，工夫した。

また，台本の台詞については，楽曲紹介に終始せず，その楽曲を聞いた第一印象を大切にして台詞を書いていくことで，クラシックを初めて聞く子どもたちが様々な情景を想像できるように考えた。

「コンサートプロデュース論」の際には，ナレーターが読みにくい台詞であったり，棒読みであったりと，観客を意識した台本の作り方などに苦労していたが，前回の反省を活かし，言いやすい台詞回しなどにするよう，観客を意識したコンサートの進行に重点を置いて何度も推敲を重ねた。

台本作成の目途が立つと，次に進行表を作成した。進行表については，2021 年度後期開講科目の「音楽ビジネス論」の林睦先生にご担当いただいた「アウトリーチ」の授業にて得た学びを今回のコンサートに活かしている。以下は彼が作成した進行表の一部である。

西区文化フェスタ２０２２【おはなしおんがくかい　親子で楽しむクラシック】進行表					
時間	進行	ナレーション原稿	出演者出ハケ	照明	スライド	スタッフ
13:05	ナレーション(1:30)	本日は【西区文化フェスタ2022 おはなしおんがくかい 親子で楽しむクラシック】へご来場いただきありがとうございます。本日は私たち札幌大谷大学音楽学科の学生が皆さんをお迎えいたします。どうぞお身体をリラックスして，お話までお楽しみいただければ幸いです。 さて，まずはじめに演奏したのはイギリスの作曲家，エルガーの「愛のあいさつ」です。もしかしたらどこかで聞いたことがある方もいたのではないでしょうか。 この曲は，エルガーが周りの人々の反対を押し切って結婚を決めたアリスという女性に，婚約の贈り物として送った曲で，とてもロマンチックなクラシックの名曲です。ひとを恋することの幸せが込められた美しい音楽をお楽しみいただけたのではないでしょうか？ さて，続いては，豆腐の父と呼ばれる作曲家，バッハが残した名曲たちをメドレーでお届けいたします。 バッハはとても長寿で，無事にたくさんの愛情を注ぐ人でした。そしてその音楽にはどこか温かく，温かい空気が流れています。 その雰囲気をどうぞお楽しみください。	啓越，山越ハケ 荒木登場 月田，相澤，山越登場			**白田** 口頭表出ハケ **小林** ピアノいすt出入れる
	(5:50)	**【バッハ名曲メドレー】**（PI 連弾） 『羊は安らかに草を食み』『目覚めよと呼ぶ声あり』 『メヌエット(2曲)』『主よ，人の望みの喜びよ』				
	ナレーション(1:15)	知れば知るほどに，聞けば聞くほどに奥が深い，これこそクラシック音楽の魅力なのではないでしょうか？ぜひ皆さんもクラシック音楽に耳を傾けてみてくださいね。 さて，次はフランスの作曲家サン＝サーンスの「動物の謝肉祭」を演奏とナレーションでお届けいたします。「動物園Ⅱ」は「ムーニプル」お馴染りのことです。まんな動物やこんな動物がたくさん登場しますよ！どうぞ最後まで動物たちの世界をお楽しみください。 **(荒木上手に移動)**	荒木登場			**白田** 虫笛x3 (位置内笛) **小林** ナレーションいすt ジューパいす マイクスタンド
13:15		**【動物の謝肉祭】**		舞台照明暗転さ輪郭		

（2022 年度卒業研究　授業資料「西区文化フェスタ 2022「おはなしおんがくかい　親子で楽しむクラシック」進行表」より引用）

この進行表には，所要時間・ナレーションの台詞・主演者の動きや照明に関する指示も入っているが，この時点での進行表はあくまで「現時点の想像による」ものであり，リハーサル等で実際に出演者やスタッフが動いた結果，変更が必要になる可能性について指摘し，本人もそれについて納得したうえでリハーサルへ進んだ。

５－５．リハーサル進行

リハーサルについては，本学響流ホールにて３回実施した。

３回のリハーサルはそれぞれ，演奏中心の「音楽稽古」，舞台上での動きを確認する「場当たり稽古」，最終的に本番同様に行う「最終稽古」として実施の意味をはっきりと持たせて行うよう指導を行った。

本番会場と同じサイズにビニールテープを貼り，仮想の会場を作成することによって，「観客からどう見えているか」ということを意識してリハーサルを進めた。この点は昨年度「コンサートプロデュース論」にて初めてコンサートをプロデュースした際には，あまり意識出来ていなかった点である。

また，学生たちは対面形式でのコンサート実施がほぼ初めての経験であったため，ステージの出入りや立ち居振る舞い等の指導も併せて行う必要があった。

５－６．チラシ，プログラム作成

プロデュースしているＫ氏一人では仕事量に限界があり，またリハーサル運営もしなければならないことから，スタッフとして参加した学生に作成をお願いすることにした。以下，実際に作成したチラシである。

チラシについては，一目でどのような層の方にご来場いただきたいかが分かるデザインにした。

また，載せる情報も必要最小限に留めることで，情報過多になることの無いよう注意している。

チラシは，西区役所内，本学学内に設置し，広報活動を行った。

また，Ｋ氏は Instagram アカウントを開設した。開催 10 日前からはカウントダウンの投稿を

行うなど，SNS 上でも積極的な広報を行っていた。

これは，彼ら学生が普段一番身近にあるツールが SNS であり，彼ら自身が演奏会の情報を得る手段として SNS も活用されていることから実験的に使用した。

プロデュースしたＫ氏は終了後，Instagram の広報がどの程度の影響があったかは不明だとしながら，一種の活動記録として開設した意味があったのではないかと振りかえっている。

コンサートといえば，チラシを配布して集客することが今はまだ一般的だが，今後アウトリーチ活動を含めた演奏活動を行っていく中で，SNS やホームページによる広報活動についても積極的に行っていくことが必要だと，私自身も感じている。

また，当日観客へ配布するプログラムについては，当初は作成する予定では無かったが，演奏曲目を明示する必要があると，準備途中にて急遽作成することになった。モノクロ印刷でのお渡しとなったが，理想はカラー印刷にてお渡しをしたかったと，終了後にＫ氏より反省があった。

以下，当日に配付したプログラムである。

西区文化フェスタ2022
おはなしおんがくかい 親子で楽しむクラシック

Program

♪エルガー作曲：愛のあいさつ

♪バッハ名曲メドレー
『羊は安らかに草を食み』『目覚めよと呼ぶ声あり』
『メヌエット』『まよ、人の涙が心震びを』

♪サン＝サーンス作曲：動物の謝肉祭
序奏とライオンの行進
かめ
象
水族館
長かご
ピアニスト
化石
白鳥
終曲

♪シュトラウス作曲：ラデツキー行進曲

出演
相澤　宮香　荒木　さつき　石川　梅枝　榎越　早海
月出　菱梁　花坂　大間　山縣　優

スタッフ
清水　梁美　白山　梨奈　平栗　由羽

企画・代表
小林　直人

札幌大谷大学芸術学部音楽学科

５－７．ホール打ち合わせ

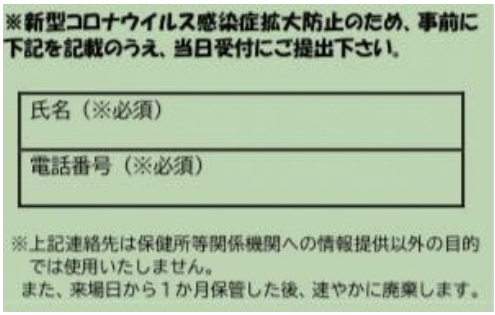
本番会場である，「ことにパトス」が７月末まで改修工事であったこともあり，事前打ち合わせはホール担当者と学生との口頭での打ち合わせのみとなった。

実行委員会との打ち合わせにおいて，新型コロナウイルス感染症対策についての打ち合わせが最も煩雑であり，通常の公演に加えての準備は，学生にとって一番頭を悩ませた。

感染が発覚した場合に備え，当初予定にはなかった入場整理券を作成することになった。氏名・電話番号を来場者にご記入いただき，終了後に回収した。

入場整理券は西区役所で預かっていただき，問い合わせは西区文化フェスタの方でご対応いただいた。

以下，実際の入場整理券である。



５－８．当日進行

本番当日は，９時～16時までの使用であったため，以下の流れでタイムテーブルを組んだ。

９：00　集合，調律

10：30　ゲネプロ

12：30　開場

13：00　開演

本番当日に初めて会場入りをしたことで，やはり入念に準備を進めていたはずが，細かなアクシデントは多々起こった。スクリーンの位置が低すぎて，客席から見えにくいことや，何より照明機材を初めて見たことから，想定の照明プランではうまくいかず，一から作り直すこととなった。

演奏時間60分のプログラムを２時間弱のゲネプロ時間で満足にリハーサルすることはやはり難しく，結局は，ホールスタッフの方の多大なお手伝いを頂きながら照明を操作することとなった。

５－９．本番を終えての考察，反省

当日は33名のお客様にお越し頂いての公演となった。会場自体があまり大きくはないこと，広報活動にあまり力を入れることが出来なかったことから考えて，多くのお客様へご来場いただけたのではないかと思う。

反省としては，３点ある。

１点目として，ホール担当者との打ち合わせ機会が多く必要だったとＫ氏自身も，指導を担当する私自身も感じている。

大谷記念ホールや響流ホールの設備とは設備が大きく異なるため，当日のゲネプロにて大変に

焦る結果となった。結果的にホールスタッフの方に多大なご協力をいただいたため，コンサートは挙行できたものの，次年度以降は注意が必要だと感じた。また，学生へホール担当者との打ち合わせ時に確認すべき内容について整理し伝える必要があると感じた。

２点目に，アウトリーチとは何か，アウトリーチと普通のコンサート違いなどについての講義を行い，意義や意味を再認識した上での活動にすることで，スタッフとして参加したＫ氏以外の学生たちが，より多くのことを学ぶことができたのではないかということだ。Ｋ氏は卒業研究としてプロデュースを行うという明確な目的があったが，スタッフの学生たちについては，アウトリーチの意義について，明確に示すことで，より学習効果が強まったのではないかと思っている。

３点目に発表時期についての反省がある。今回のコンサートは４月にスタートし，９月本番というスケジュールであったため，ややあわただしいスケジュールとなった。特に今回は，通常のコンサートではなく，ストーリー仕立ての演奏会ということで，演奏以外の要素も多く，準備期間が少なかったことは否めない。可能であれば，４月スタート・年度末頃の発表にすることが望ましいが，今後も同時期のイベントに出演する場合は，一層スピード感を持った準備が必要であるし，そのための指導が必要であると感じた。

良かった点として，ステージマナーについてリハーサルで学ぶ機会を得ることが出来た点があげられる。

学生たちは日々音楽を学んではいるが，学外での発表の機会が多くある学生は限られている。人前での発表に不慣れな学生たちに対し，リハーサルにてステージマナーについて指導できたことは，アウトリーチ活動以外にも活きる知識となると期待している。

今後について考えた際に，今回Ｋ氏はコンサートプロデュースに元々興味があったため，かなり積極的に動いたが，今後も同じように興味があり，能動的に動くことのできる学生が毎年在籍しているとは限らない。様々な興味関心を持つ学生に対して，アウトリーチ活動をどのようにアプローチをしていくかは大きな課題である。入学時から３年次の開講科目での指導内容を含め，学生面談や普段の学生の様子を伺いながら，学生の興味関心を把握しておくことも必要であるし，「コンサートプロデュース論」での成果や学生の満足度を高めることも，次へのステップとして改めて重要なことであると感じた。

６．今後に向けて

彼のような，将来プロデュースに興味がある学生にとって，コンサートプロデュース論でノウハウを学び，翌年に自主企画で公演をプロデュースできたことは，大きな成果になったと考えられる。彼の卒業研究での論文の一部を参照する。

> 本卒業研究を通じて「コンサートプロデュース」の一連を実践的に学ぶことができ，大変貴重な経験となった。観客から見えている表舞台の裏でどれだけ多くの過程が行われている

のか，実践でなければ実感することのできない多くの気づきがあった。

私には「コンサートプロデュース」の機会を更に充実させていきたいという理想がある。企画者の発想や計画が全体の土台となる大変責任の重大な「プロデュース」だが，想像や理想を形にするという大きな魅力を秘めている。とはいえ，企画立案から台本作成，スケジュール管理などの全プロセスの責任を負っている。この先，仕事として本格的に「企画」するとなると更に，会場の選定，手配，予算管理といった事務的作業も多い。そこには豊富な知識や経験，人脈に至るまで幅広く求められる。やはり「どれだけ現場の実態を知っているか」ということだろうか。この先，大学卒業後についても現場を知る機会を充実させていくと共に，将来的には「演奏会を開催したいがどの様なプロセスを踏んでいけばいいか分からない」そんな悩みを持つ音楽家たちと演奏会開催を繋げる架け橋の役割を担っていきたい。「総合芸術」としての音楽を伝えていくと共に，新たな可能性を引き出していけるような「企画・プロデュース」を実践していきたい。本卒業研究での活動は間違いなく私の中での貴重な経験となり，理想に近づく第一歩となったように思う。

（2022年度卒業研究　アウトリーチ活動報告　11頁より引用）

この文章からもわかる通り，満足できたと同時に，反省点も多々見つかり，しかしながら，「またやりたい」,「次回はもっとこうしたい」，という意欲的な姿勢が見られたことは大変良い結果である。

コンサートプロデュース論からアウトリーチ活動につなげる流れは，大変有益であると確信し，今後も継続的に行っていく予定である。そのうえで，今後の改善策として以下のことを提案する。

まず１つ目に,「コンサートプロデュース論」の内容を，アウトリーチと関連させられるよう，今一度整理することである。

履修学生に対しても，翌年に外部発表があることを最初から公表し，それを踏まえた受講を促すことで，学習効果は高まると期待する。そして，発表はやはり有観客で行い，近い場所に出向いての公演をすることも有益だと考える。例えば，附属幼稚園のホールを使用させていただいて，園児向けの公演を考案したり，市内小中学校に出向いての音楽鑑賞教室を行ったりと，同じ学園内や，東区の地域との関わりを生かした公演にしても良いと思う。

２つ目は，アウトリーチ先の方との交流の活発化である。今回，西区文化フェスタでの事業となったが，これはできれば継続して実施していきたいと考えている。その際に，西区文化フェスタ実行委員の方，西区役所の方，会場の「ことにパトス」のスタッフの方などと交流をもっと盛んに行うことで，広報活動や当日会場の照明操作等についてよりスムーズに進めることが出来たであろうし，何よりも将来の仕事につながる可能性のある人脈を形成できることが期待される。

３つ目として，アウトリーチの専門家による講習を増やすことである。

現在は，３年次後期に開講される「音楽ビジネス論」の中で林睦先生に全15回の講義のうちの１回を使ってアウトリーチの概要を講義いただいているのみに止まっている。

今回のコンサートは，私が窓口となり，学生指導全般を行ったが，出来ることなら，アウトリーチの専門家に断続的に関わっていただき，アウトリーチ概論の講義，学生の企画に対するアドバイスなどができると理想的である。これは，本アウトリーチがもっと本格化し，活性化を図る際にぜひ前向きに検討したい。将来的には，アウトリーチを４年次の科目として設定し，授業カリキュラムの中で実施できることが理想である。

私個人としては，「コンサートプロデュース論」や「アウトリーチ活動」は，将来プロデューサーなど音楽業界の裏方の仕事を目指す学生のみならず，演奏者として将来活動していきたい学生や，ピアノ教室の講師を目指す学生などにも履修してほしい科目である。

演奏者を目指す学生にとって，リサイタルやコンサートを作り上げるまでの流れや，プログラムへ記載するプロフィールの依頼方法等，演奏することに付随する様々な作業を学ぶことができる。また，音楽教室の講師を目指す学生にとって，発表会の企画・運営は避けては通れないものになるかと思うが，この科目を履修することで，基礎を学ぶことができる。

今までは，そのような基礎の知識は見様見真似の修得や，先達からのアドバイスのような形で伝わっていた。しかしながらコンサートの形がコンサートホールでの演奏のみならず，YouTubeや各種オンラインツールを使用しての配信なども増えてきていたり，音楽だけではなく，照明や映像等を用いた視覚効果を利用するコンサート，ダンスや朗読等の別の要素を加えたりなど，多種多様化しており，今後もその傾向は続くであろう今，コンサートの基礎を知る場の重要性が増しているように感じている。

このような履修の必要性を訴えることで履修者の増加を図り，コンサートプロデュース論からアウトリーチへ繋げていくことで学習がより深まるよう，一担当教員として学生たちを支えていきたいと思う。

また，北海道内には，あまり活用されていないホールなどが多数存在する。そこで学生たちが定期的にアウトリーチ活動としてコンサートを企画・発表することで，音楽の力を通して地域の活性化を行うと同時に，学生たちが外部への発表の機会を積極的に活用するようになってほしいと願っている。これは，音楽総合コースの学生のみならず，全てのコースの学生が関わることが出来る活動である。授業で修得した知識や技術を学内に留まらせず，学外で発表することで，学生の学修成果の水準が更に高まり，また大学の教育研究活動の維持につながると考える。